

受験番号

【一】次の文（一）～（四）の傍線部の漢字と、後の各群の①～⑥の傍線部の漢字が同じものを、それぞれ一つずつ選び、番号で答えよ。

（一）関税率を米国とセツシヨウする。

- ① 事実をシヨウサイに調査する。
- ② 二人の意見がシヨウトツする。
- ③ 商店と販売価格のコウシヨウをする。
- ④ 作業工程のシヨウリヨクカをはかる。
- ⑤ 講演の依頼をシヨウダクする。
- ⑥ 友人を知人にシヨウカイする。

（二）カイセキ料理を食べる。

- ① 疑問だったことがヒヨウカイする。
- ② 自然界ではキカイな現象が起こることがある。
- ③ そのことはカイモク見当がつかない。
- ④ 病人をカイゴする。
- ⑤ ダンカイの世代が大量に退職した。
- ⑥ 古い町を歩くとカイコの情が湧いてくる。

（三）鬼がモウゼンと迫ってくる。

- ① モウソウにふけることがある。
- ② すべての可能性をモウラする。
- ③ 全国大会に出場できてホンモウです。
- ④ 試合で体力をシヨウモウしてしまった。
- ⑤ 山林火事で建物がモウカに包まれる。
- ⑥ 秋祭りに神社にモウでる。

（四）相互フジヨの精神が大切である。

- ① 将来を見越して事前にフセキを打つ。
- ② 新しい運転免許証がコウフされる。
- ③ フソクの事態にそなえる。
- ④ 自分の家族をフヨウする。
- ⑤ 遠方の支店にフニンする。
- ⑥ 局面の打開にフシンする（心をいためる）。

【二】次の文章を読んで、後の問い（問一〜八）に答えよ。

人間は、ある種の思いがけない体験をすると、それがなぜ起こったかの「仮説」を持ち、仮説から論理的に導かれる「推論」を行い、結果と^アシヨウゴウして仮説を「検証」する、という思考回路を採っている。「帰納的推論」である。それで、赤信号で道路を渡れば交通事故に遭うとか、火に手を近づければ火傷をすることを学び、二度としなくなる。このように結果が明白にわかる場合は簡単だが、結果が曖昧であったり、神秘的に見える体験をしたりすると、思考に狂いが生じてくる場合がある。

例えば、ある晩、友人が夢枕に立って、翌日その人が亡くなった。予知したのか、テレパシー（注1）で知らせてきたのか、超感覚的知覚がはたらいて前もって^イサツチできたのか、夢と死が偶然に一致したのか、とさまざまに思う（「仮説」を持つ）。何か超能力（予知能力やテレパシー）のようなものがあるのかもしれないと思いついてしまう（「推論」する）と、それによって他のことも説明できるかもしれないと欲張つてあれもこれも強引に解釈する（結果の「検証」を行う）。このような思考の流れの中で無意識のうちに超能力を信じ込んでしまう二つの事柄が続けて起こると、その解釈に多くのバイアス（注2）がかかるからだ。

まず仮説を持ち出す段階で「確証バイアス」が入り込む。自分にとって確かそうな仮説しか思い浮かべないことだ。右の例で言えば、夢と死が偶然に一致したとはとても思えないと簡単に棄却してしまう。どの仮説も等しく考える必要があるのに、初めからある仮説を除外してしまう。どの仮説も等しく考える必要があるのに、初めから^アある仮説を除外して考えるという^イバイアスがかかっているのである。

もう一つは、推論の段階で、ある目立った事柄二つ（AとBとする）が続けて起こると、ただ目立つという理由でその二つを結びつけて（Aが原因でBが起こったと）考える癖がある。この二つに^ウ関連（因果関係）があると推論してしまう傾向で、「関連性の錯誤」あるいは「相関の錯覚」と呼ばれている。夢をみたということとその人が死んだということを、必ず関連があると思いつく心的作用である。単なる偶然の一致（A、Bは無関係）とは考えないのだ。

(a)、ある仮説に対して、それに合った事例のみで判断してしまい、反証事例を検討しないということがある。例えば、ある事件の犯人がAさんだろうという仮説を持てば、日常の振る舞いでも悪いとこ

るばかりを思い浮かべてAさん犯人説を肯定しようとする。犯人がAさんであれば、足を引きずっているはずがないとか、普段レインコートを着ているのを見たことがない、というような(エ)Aさんには合致しない証拠には目をつむってしまうのだ。これを(オ)「肯定性のバイアス」と呼ぶ。一般に人は、否定的な情報(「あの人は犯人ではない。」)より肯定的な情報(「あの人が犯人だ。」)として受け入れる方が精神的な負担は小さく利用しやすいので、自然のうちにそちらに傾いた思考をするのである。

(b)、二つの事柄が相次いで起こった場合、それを関連づけて何らかの学習をするというのは自然なことであり、危険を避けるには有効で重要な行為とも言える。

「熱いストーブに触れれば火傷をする。」とか「体操をしないで水泳をすれば心臓麻痺を起こすことがある。」などで、(カ)生物が持つ本能かもしれない。例えば、鳥はきれいな色をした虫をむしる避けられている。きれいな虫には毒があるか、極めて不味いという関連を学んだためだ。(すると毒を持たない虫であっても、姿だけきれいにして鳥から身を守るという生き残り策(擬態という)を考え出している。生物は虚々実々の生き残り戦略を考え出しているのである。)

(池内了「疑似科学入門」による)

(注) 1 テレパシー(ことばや五感を使わずに離れた相手に自分の思考や感情を伝達する能力のこと。3
2 バイアス(ここでは偏向の意。)

問一 二重線部⑦・⑧のカタカナを漢字に直せ。

問二 空欄(a)・(b)にあてはまる最も適当な語を、次の①～⑦のうちからそれぞれ選び、番号で答えよ。

- | | | | | | | | |
|---|-------|---|------|---|-----|---|------|
| ① | そして | ② | つまり | ③ | さらに | ④ | あるいは |
| ⑤ | したがって | ⑥ | もつとも | ⑦ | しかし | | |

問三 傍線部(ア)「ある仮説を除外して考える」とあるが、ここでの「ある仮説」とはどのようなものか。本文中から十一字で抜き出せ。

問四 傍線部(イ)「バイアスがかかっている」とあるが、このバイアスを何というか。本文中から六字で抜き出せ。

問五 傍線部(ウ)「関連(因果関係)がある」とあるが、夢の具体例では何と何とが関連があるのか。それぞれ本文中の語句を用いて答えよ。

ことが関連ある。

問六 傍線部(工) 「Aさんには合致しない証拠」を言い換えたことばを本文中から四字で抜き出せ。

問七 傍線部(オ) 「肯定性のバイアス」に陥りやすい理由を簡潔に説明せよ。

問八 傍線部(カ) 「生物が持つ本能」とは、ここではどのような本能のことか。次の文の空欄に本文中の語句(六字)を補え。

□ という本能。

【三】次の文章は、小池昌代の小説「石を愛でる人」の一節である。これを読んで、後の問い(問一〜五)に答えよ。

趣味といってもいろいろあるが、山形さんの場合は、「石」であった。「石」を愛^アでることであった。そのようなひとを、一般に「愛石家」と呼ぶらしい。愛猫家とか愛妻家とか、考えてみれば、世の中には何かを愛して一家を構えるほどの人が結構いる。しかしアイセキカと聞いて、即座に石を愛するひととは、ちよつと思ひ浮かばなかった。

山形さんから「アイセキカ」友の会に入会しましたよ、と聞いたときは、えっ? 愛惜? と聞き返してしまった。山形さんは、そのころ奥さんを病気でなくしたばかりのところだったから。山形さんが、石を愛するようになったのが、奥さんをなくしたと関係があるのかわからないのかは、よくわからない。わざわざ表明したことはないが、実はわたしも石が好きである。どこかへ行くと、自分の思い出にと、石を持ち帰ることが今までにもよくあった。

子供のころも、海や川にいくたびに、小石を拾っては家に持ち帰ったが、当時は石よりも、石を持ち帰るといふ行為そのもののほうに、特別の意味があったようだ。部屋に持ち込まれた石はきまっつて急速に魅力を失い、がらくたの一つになってしまった。そもそも水辺にある小石は、川や海の水に濡れているときは妙に魅力があるのに、乾いてしまうと、ただの石だ。濡れている色と乾いた色って、同じ石でも随分違う。水辺の石の魅力をつくっているものが、実は、石そのものではなく、水の力であったという事なのか。

今、わたしの机の上には、イタリアのアッシジ(注1)で拾ってきた、大理石のかけらが四つある。イタリアの明るい陽にきらきらと微妙な色の差を見せてくれた、薄紅、薄紫、ミルク色、薄茶の四つの石

は、これは日本に持ち帰っても、不思議なことに色あせることがなかった。

一人でいる夜、疲れて心がざらついているようなとき、その石を手てのひらのなかでころがしてみる。石とわたしは、どこまでも混ざりあわない。あくまで石は石。わたしはわたしである。石の中におたしは入れず、石もわたしに、侵入してこない。その無機質で冷たい関係が、かえってわたしに、不思議なやすらぎをあたえてくれる。

人間関係の疲労とは、行き交う言葉をめぐる疲労である。 (a)、^A言葉を持たない石のような冷や

かさが、その冷たいあたたかさが、とりわけみに身にしみる日々があるのだ。こうしてみると、わたしだつて、充分、アイセキカの一人ではないか。

そういえば、生まれて初めて雑誌に投稿した詩が、「石ころ」というタイトルだった。夜の公園に残された石ころが、まるで、なにかをつかみそこねた、握りこぶしのように見えた。それだけのことを書いた幼稚な詩だったが。

子供のときは、道に石があれば、とりあえずは、足で蹴ってみた。武器として、なにものかに向かつて投げつけたり、水のなかに意味もなく、ぼちゃつと落としてみたり、拾って、それに絵を描いてみたり、積み上げたり、地面に印のかわりに、置いてみたり……。石ころとは、随分、多方面に渡って、つきあってきたものだ。

ひとと石との、こうしたあらゆる関係の先に、石をただ見つめるといふ、アイセキカたちの、^A透明な行為がひろがっているのだろう。

^Bさて、そのアイセキカ、山形さんは、普段も石のように無口なひとである。ある地方テレビ局の制作部門に勤務している。おいくつですか、と尋ねたことはないが、五十歳はとうに過ぎてはいるはずだ。

山形さんの担当するインタビュー番組に、わたしが出演させてもらったのが知り合うきっかけだった。実はわたしは、テレビのない生活をして、十年くらいになる。みたい番組というのが、ほとんどないし、たまに、人の家でテレビがついていると、テレビとは、こんなに騒がしいものであったかとびっくりする（特にコマーシャルが、ひどい）。

わたし、テレビ持ってませんから。——しかしそれは出演を断る理由にはならなかった。

わたしはこんな仕事をしてますが、テレビを持っていないのは、今では普通のことです、と山形さんは言った。しかし、見るのと出るのは、また違う。まあ、一度くらい、遊びにいらっしやっつてはいか

がです？

結局、その十五分番組にわたしは出ることを決めた。オペラ歌手と評論家のインタビュアーを相手に、とても緊張しつつ、一生懸命になって、詩のことをしゃべり、朗読までして、収録を終えたのだ。終わったあと、暗い夜道を一人で帰りながら、テレビとは、恐ろしく、自分を消費するものだと思う。インタビュアーたちとの関係も、あまりにも希薄で一時的・図式的なものであり、そんなことは彼らにとって、仕事のひとつなのだから当たり前のことなのに、その当たり前のことに傷ついてしまった。

そのうえ、自分の言ったことが、終わったあとも、わんわんと自分のなかで反響している。詩人という肩書で得意になってしゃべった自分——これは一種の①詐欺であると思った。そのことを自覚したうえで、玄人としてりっぱに②騙せたのならそれでもいいが、わたしは半分素人の様な顔をして、詩とは……とか、詩との出会いは……なんて遠慮がちに、そのくせ内心、③とくとくとしゃべっていたのだから、なんだか、タチが悪いような気がした。

わたしのそんな落ち込みを、山形さんは、まあ、テレビに初めて出た人間はそんなもんですよ、と石のように表情のない顔で、のんびりとなぐさめてくれた。ここを通過するとね、もう怖くはありません。気をつけてくださいよ、テレビに出ることは、けっこう魅力があるようですからねえ。みんなそう言いますよ。こいけさんもそのうちね——と山形さんは言った。——ぜったいにテレビにどんどん出たくなりますよ。そう、自信をもって決めつけるのだった。

その山形さんから、「石を出品しましたので、ぜひごらんください」という、薄いぺらぺらのはがきの案内状が届いたのは、東京に梅雨入り宣言が出された日のことだった。さらに、④追い討ちをかけて電話までかかってきて、石はいいですよ、ぜひ、見にきてくださいよ、何日と何日なら、わたしも行ってますから、と。

その、動かぬ大山のような山形さんの言い方には、断わられることなど、おのれの辞書にはないというようにならずうしさがあった。

「わかりました、じゃあ行きますよ（行けばいいんですよ）。わかりましたよ（まったくもう）」このわたしの返答も、充分すぎるほど失礼な言い方ではあったが、山形さんは、ともかくもわたしが行くと答えると、うむ、と満足げにうなずいて日取りを決め、それじゃあ、と言って電話を切った。

(注) 1 アッシジ——イタリア中部にある町。中世の石造りの街並みが残る。キリスト教の巡礼地として多くの人が訪れる。

問一 二重線部ア〜ウにふりがなをつけよ。

問二 空欄(a)に入れるのに適当な接続詞として最も適当なものを、次の①〜⑤のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- ① しかし
- ② だから
- ③ ところが
- ④ また
- ⑤ 一方

問三 傍線部(ア)〜(ウ)の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①〜⑤のうちから、それぞれ一つずつ選び、番号で答えよ。

(ア) 透明な

- ① ぬくもりのない
- ② 悪意のない
- ③ まじり気のない
- ④ 形のない
- ⑤ 暗さのない

(イ) とくどくと

- ① 意欲満々で
- ② 十分満足して
- ③ 利害を考えながら
- ④ 始めから順番どおりに
- ⑤ いかにも得意そうに

(ウ) 追い討ちをかけて

- ① 無理に付きまとい
- ② 強く責め立てて
- ③ しつこく働きかけて
- ④ 時間の見境なく
- ⑤ わざわざ調べて

問四 傍線部A「言葉を持たない石のような冷やかさが、その冷たいあたたかさが、とりわけ身にしみ」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- ① 周囲の人の慰めや励ましより、物言わぬ石がもたらす緊張感の方が、自分が確かな存在であることを実感させ、それが人としての自信を取り戻させてくれるということ。
- ② 石と互いに干渉せずに向き合うことは、言葉を交わす人間関係の煩わしさに疲れていらだつた心を癒し、ほっとするような孤独を感じさせてくれるということ。
- ③ 物言わぬ石の持つきびしい拒絶感に触れることで、今では失ってしまった、周囲の人との心の通い合いの大切さがかえって切実に思えてくるということ。
- ④ 現実の生活では時に嘘をつき自分を偽ることがあるのに対し、物言わぬ石と感覚を同化させていく時は、虚飾のない本当の自分を強く実感できるということ。
- ⑤ 乾いて色あせてしまった水辺の石でも、距離を置いて見つめ直してみることによって、他人の言葉に傷ついたわたしを静かに慰めてくれるように思えてくるということ。

問五 わたしの山形さんへの見方は、この文章全体を通してみると変わっていくが、傍線部B「さて、」以降に描かれた山形さんの人物像はどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選んで、番号で答えよ。

- ① 初めてのテレビ収録で傷つき落ち込んでいたわたしを励まし、テレビ業界の魅力を説くことと、で希望を与えてくれる明るさを持つ一方で、繊細な内面に凶々しく入り込んでくる人物。
- ② 初めてのテレビ収録で傷つき落ち込んでいたわたしにテレビ出演の楽しさを説いて自信を持たせようとする度量の大きさを持つ反面、自分の要求はすべて通さずにはいられない人物。
- ③ 初めてのテレビ収録で傷つき落ち込んでいたわたしの無表情のままに慰めてくれる不思議な優しさを持ちながら、揺るぎない態度でわたしの心情や行動を決めてかかる強引な人物。
- ④ テレビの仕事で自己嫌悪に陥ったわたしの心を気遣うふりをして、自身の趣味である石の魅力に引き込まうとする自信家であり、わたしの戸惑いをくみ取ろうとしない無神経な人物。
- ⑤ テレビの仕事で自己嫌悪に陥ったわたしの心を見通したうえで話題をそらしてごまかし、当初のインタビュートは関係のない個人的な趣味の世界に引き込まうとする無責任な人物。